

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 近代日本語教科書における謙讓表現

|       |                                                                                                                   |
|-------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2023-02-13<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 薛, 静, Setsu, Sei<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/00002461">https://doi.org/10.57529/00002461</a>                                 |

# 『近代日本語教科書における謙讓表現』の要約

國學院大学大学院 文学研究科

薛 静

本論文は、近代中国人留学生教育の第一人者である松本亀次郎と日本語教育の大本山であった宏文学院の日本語教師編纂の日本語教科書における謙讓表現の形式を考察しながら、敬語の歴史的な変遷の面から近代日本語教科書における謙讓表現の特徴を明らかにしているものである。本論文は、序章、第1部「留学生向けの日本語教育」、第2部「松本亀次郎編纂の日本語教科書における謙讓表現」、第3部「宏文学院の日本語教師編纂の日本語教科書における謙讓表現」、第4部「近代読本教科書における謙讓表現」、最終章から成る。

日本語の表現の特徴である敬語は上代から使用が認められる。敬語の発生について、辻村（1977）が「敬語は古代人の神（人智人力をこえた自然界の存在）に対する畏敬の気持ちに基づいた言葉のタブーや言霊思想から生まれたものと考えられる。」と述べているように、敬語は最初に専ら神への畏敬の気持ちを表すのに用いられた高い敬意を含んだ表現であったと考えられる。敬語は上代には尊敬語と謙讓語のみ存在し、中古以降、丁寧語が現れた。近世になると、複雑な身分制度の影響で、敬語の使用はさらに厳格に行われるようになった。明治維新により士農工商の身分制度が崩壊し、敬語の使用は変わってきた。また、教育制度の確立、とりわけ国定教科書の使用によって近代共通語のなかに位置づけられる敬語体系が普及したことが解明されてきた。敬語の教育は従来、国語教育の一環として注目されてきたが、日本語学習者向けの日本語教育においてどのように行われているかは興味深い点である。近代中国人留学生向けの日本語教育は日本語教育史において重要な位置を占めている。当時、中国人留学生の教育に深い影響を与える日本語教師が多かった。彼らが編纂した日本語教科書には当時の標準的な言葉の使い方を反映する一方、各編纂者の教授法も窺われると考えられる。本研究は近代の日本語教育における謙讓表現の教授に着目し、留学生教育の第一人者である松本亀次郎と留学生教育機関として中心的な存在であった宏文学院の日本語教師が編纂した会話・語法型・文典型・読本教科書における謙讓表現の特徴及び歴史的な変遷を明らかにすることを目的とする。

第1部は第1章「近代中国人留学生教育について」で構成されている。第1章では、近代中国人留学生が日本に留学した理由から始め、留学生教育の歴史を述べる。その上で、近代の中国人留学生教育に深く影響を与えた教育機関である宏文学院、中国人留学生教育の第一人者である松本亀次郎を中心として、近代中国人留学生に対する教育の姿を明らかにしている。簡単にまとめると、近代中国人留学生に対する教育は順風満帆ではなく、波瀾万丈であった。これは留学生が政治と経済の影響を非常に受けたからである。宏文学院の課程の設置から、当時の中国人向けの教

育はただ単純な言語教育だけでなく、他の知識の学習も重視していたことが窺われる。また、留学生教育を推進するため、松本亀次郎のような留学生教育を熱心にした教師のみならず、中国政府と日本政府も中国人留学生教育に全力を尽くした。

第2部は第2章「松本亀次郎編纂の会話教科書における謙譲表現」、第3章「松本亀次郎編纂の文典型教科書における謙譲表現」、第4章「松本亀次郎編纂の語法型教科書における謙譲表現」で構成されている。

第2章では、松本亀次郎編纂の会話教科書『漢訳日本語会話教科書』、『日語会話』、『華訳日本語会話教典』を対象に謙譲表現の用例を収集して謙譲表現の特徴を明らかにしている。三つの教科書の中で、謙譲表現は多く使用されているのは『漢訳日本語会話教科書』と『華訳日本語会話教典』である。それに対して、『日語会話』における謙譲表現の使用は少ない。だいたい同じ意味の待遇表現「お（ご）…する」「お（ご）…致す」「お（ご）…申し上げる」の中で、「お（ご）…する」は昭和に入って、多く使用されるようになる。しかも、尊敬の用法も見られる。「お（ご）…申し上げる」は用例数が少ないが、1940（昭和15）年の教科書でしか見られない。「お（ご）…致す」は松本編纂の会話教科書で用例数がほぼ変化しない。「申す」の尊敬語形「申される」が見られる。また、「申す」の主語は三人称者の場合もある。「お（ご）…いただく」はどちらの教科書でも見られないが、助詞を介する形式「お（ご）…をいただく」は大正期の教科書で現れる。「あげる」は松本編纂の教科書で美化語になる傾向が見られる。「蒙る」は主に「御免を蒙る」の形で現れる。会話教科書で出現するはずがない文語の謙譲表現も見られる。

第3章では松本亀次郎編纂の文典型教科書『言文対照漢訳日本文典』、『日語日文教科書』、『漢訳日本口語文法教科書』、『日本語文法課本』を対象に文典型教科書における謙譲表現の形式を考察した上で、松下大三郎、三矢重松、吉岡郷甫の文法書との比較を行いながら、松本亀次郎が著した文典型教科書における謙譲表現の特徴を明らかにしている。松本亀次郎編纂の文典型教科書の中で、文語中心の教科書は2冊であり、口語中心の教科書は1冊であり、言文対照の教科書は1冊である。口語中心の教科書における謙譲表現の形式は最も豊富である。文法書で一切扱っていない表現「お（ご）…する」が松本編纂の『漢訳日本口語文法教科書』で見られることから、松本亀次郎は古い表現だけでなく、世間で広く使われているもののなお規範としては認められなかった表現も留学生に教授したことが知られる。

第4章では松本亀次郎編纂の語法型教科書『日本語教科書』第1巻～第3巻、『日本語のはじめ』第1篇～第3篇、『訳解日語肯綮大全』を対象に謙譲表現の用例を収集して謙譲表現の特徴を明らかにしている。謙譲動詞の中で、「あげる」は美化語になる傾向が見られる。また、「申される」は尊敬語として用いられる。さらに、現代日本語で謙譲語として認められない「出る」は謙譲語として松本編纂の語法型教科書で扱っている。謙譲補助動詞の中で、「お（ご）…申す」は相変わらずだいたい同じ意味の待遇表現の中で最も多く使用されている。一方、「お（ご）…する」は時代の変遷とともに、「お（ご）…をする」より多く見られるが、用例数は増えない。そ

れは、規範性の制限のためであると考えられる。

第3部「宏文学院の日本語教師編纂の日本語教科書における謙譲表現」は第5章「宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書における謙譲表現」、第6章「宏文学院の日本語教師編纂の文典型教科書における謙譲表現」で構成される。

第5章では宏文学院の日本語教師編纂の会話教科書『中日対照実用会話篇』、『東語会話大成』、『漢訳学校会話篇』を対象に謙譲表現の用例を収集して謙譲表現の特徴を明らかにしている。謙譲動詞の中で、「訪ねる」の意の「上がる」は井上翠編纂の教科書だけが取り上げている。「蒙る」は「名詞を蒙る」と「名詞+蒙る」の形で現れる。「差し上げる」に関する用例の中で違和感がある用例が見られる。「あげる」は美化語になる傾向が窺われる。だいたい同じ意味の待遇表現「お（ご）…する」「お（ご）…申す」「お（ご）…致す」「お（ご）…申し上げる」の中で、「お（ご）…申す」は最も多く使用されている。それに対し、「お（ご）…申し上げる」は用例数が最も少ない。「お（ご）…する」の尊敬の用法は現れるが、松本以外の編纂者は取り上げていない。「…申す」は唐木歌吉編纂の教科書以外の会話教科書で見られない。助詞を介する謙譲表現の中で、「お（ご）…を願う」はほとんどの会話教科書でも見られる。松本亀次郎編纂の会話教科書だけで文語の謙譲表現の形式が見られる。

第6章では宏文学院の日本語教師編纂の文典型教科書『東語正規』、『東語集成』、『文法適用東文教科書』、『文法應用東文漢譯軌範』、『漢譯日本語典』、『漢和對照日本語文法述要』、『漢訳日本語階梯』、『漢譯日本口語文典』を対象に謙譲表現の用例を収集して謙譲表現の特徴を明らかにしている。文語中心の文典型教科書において助詞を介する謙譲表現は全く扱われていない。「出る」、「上がる」、「御用立てる」は松本亀次郎と松下大三郎だけが口語中心の文典型教科書で取り上げている。また、「願う」は松本だけが取り上げている。「蒙る」は中国人編纂者の文典型教科書でしか見られない。「…候ふ」と「…侍り」は松本が謙譲表現として取り上げているが、他の編纂者は丁寧語として取り上げている。「お（ご）…いただく」は「お（ご）…する」と同様に、実態と規範意識の間に、ずれがあったようである。平安時代以降見られなくなった表現「まつる」と「…まつる」が文語中心の文典型教科書で見られるのは当時の学習者にとって日本語で言語生活を営むために書き言葉もまた教授の対象であったためであると考えられる。

第3部は第7章「松本亀次郎と宏文学院の日本語教師編纂の読本教科書における謙譲表現」で構成されている。第7章では『日本語読本』巻一、『日本語読本』巻二、『漢文注釈東文読本』、『漢譯対照日語読本』を対象に近代読本教科書における謙譲表現の特徴を明らかにしている。全体的には、読本教科書における謙譲表現の用例数と形式は他の種類の教科書より少ない。また、文語文より口語文の文章で謙譲表現が多く見られる。松本亀次郎編纂の読本教科書で謙譲表現が多く見られるのは教科書のページ数が多いからであると考えられる。さらに、物語で会話文が多いことが「言う」の意を表す表現「申す」や「申し上げる」が多用される原因であると考えられる。

最終章では本論文から得た結論を結んだ上で、今後の課題をまとめている。

## 謙譲表現の形式から見た近代日本語教科書における謙譲表現の特徴

### I 「お（ご）…する」の未立項と尊敬語の用法

「お（ご）…する」は近代日本語教科書において文法項目として立項されていないという特徴が見られる。この特徴は文典型、語法型教科書のみならず、会話教科書においても認められる。特に、本論文で取り挙げた文典型教科書では、この表現は文法項目として一切立項しておらず、用例数も極めて少ない。ただし、文典型教科書『東語集成』（1906）において、「お（ご）…する」は文法項目としては立項されていないが、用例数は「お（ご）…申す」「お（ご）…致す」の用例数を超え、最も多く使用されている。これは編纂者の個人的な言語意識の反映と考えられる。

### II 「お（ご）…いただく」の未発見と「お（ご）…をいただく」の使用

「お（ご）…いただく」は本論文の調査対象では全く現れない。しかし、この形式の前段階形式で、助詞を介する表現「お（ご）…をいただく」は『漢訳日本語会話教科書』と『日本語教科書』第3巻でそれぞれ1例見られる。日本語教科書における「お（ご）…をいただく」は用例数がかなり少ないが、当時の日本語教育の現場で「お（ご）…いただく」はまだ広く使用されていなかったと考えられる。

### III 「…て差し上げる」の僅少

「…て差し上げる」は明治後期から1940（昭和15）年ごろ発行された会話と語法型教科書では使用がかなり少ない。この結果は田中（2002）の研究とほぼ合致している。ところで、日本語教科書においてこの表現は明治時代と大正時代には見られるが、昭和の教科書では全く見られない。また、伊藤（2018b）によると、「…て差し上げる」は昭和10年代になると、恩着せがましい意味合いで用いられる用例が見られる。しかし、日本語教科書においてはそのような用法は見つからない。

### IV 「あげる」の美化語化

調査対象とした教科書において、「あげる」が美化語として用いられた用例が見られる。「あげる」が日本語教科書においていつから美化語になるのかについては、本研究で取り扱った教科書を見てもはっきりしない。しかし、全ての教科書の中で、最も早く出版された『東語正規』（1900年 明治33年）において「あげる」は全く見られない。1906（明治39）年に入ると、数多くの日本語教科書が出版されたが、「あげる」はそれらの日本語教科書で美化語として使用され始めている。

### V 「…申す」の衰退と「申す」の尊敬語の用法

「…申す」は本論文の調査対象とする24冊の教科書において非常に稀であり、1例のみである（『中日対照実用会話編』（1906））。小松（1968）によると、「…申す」は江戸時代に成立

し、使用量が時代の変遷とともに減っていき、大正の末に減んでいる。したがって、日本語教科書における「…申す」の衰退は小松の研究と一致していると言える。

「申す」の尊敬語の用法について、菊地（1997）は「申す」と「まいる」の歴史の変遷を整理しており、両語は上代から明治以降まで4段階の変化を経てきたことが知られる。しかし、それは謙譲語Ⅰから敬意が下がる変化であり、「申す」を尊敬語として用いられた用法は全くみられない。また、大石（1966）は「オ名前ナント申シマスカ。」の例を挙げており、「標準的な使い方とは認めがたい。「オッシャイマス」を採る」と指摘している。

## VI 「申す」の尊敬語形「申される」の使用

尊敬語の意を表す「申される」は全ての調査対象の中で6例あり、しかも、松本亀次郎編纂の教科書でしか現れない。日本語教科書において「申される」の用例が見られる理由は2つあると考えられる。

①中世から使用されていた表現をそのまま日本語教科書で掲げたからである。

②松本亀次郎は松下大三郎の影響を受けたからである。

## VII 下位者に対して使用する「お（ご）…申せ」

「お（ご）…申す」の命令形「お（ご）…申せ」を下位者に用いる用例は3例あり、1例は明治後期の教科書で見られ、他の2例は大正期の教科書で現れる。山崎（1990）はこの表現は現代語では特別な場合にもかなり少なく使用されているが、近世においては、かなり普通な表現であると指摘している。そこで、このような表現が大正期にも位相によっては残っていたことが反映したものと推測される。

## VIII 「お（ご）…申し上げる」の僅少と形式内で加害性がある語の使用

調査対象全体で「お（ご）…申し上げる」に関する用例は12例ある。この表現は、文典型教科書では立項されているが、会話教科書における用例数は極めて少ない。それに対して、語法型教科書においてはこの表現がより多く見られる。「お（ご）…申し上げる」の「…」に入る語の異なり語数は6であり、内訳は「伺ひ」「返し」「歎び」「断り」「辞退」「訪ね」である。その中で、加害性を含む語「辞退」が見られ、大正の文典型教科書で現れる。伊藤（2018a）によれば、「お（ご）…申し上げる」は明治元年から大正末までは形式内に入る語に加害性を含まず、現代に入ってから、その用法が見られるようになった。したがって、松本亀次郎編纂の大正期の文典型日本語教科書における「お（ご）…申し上げる」の用法は現代の用法に近いものと言えるであろう。

## IX 会話教科書における文語形式の出現

会話教科書で文語の謙譲表現が見られるのは松本亀次郎編纂の会話教科書のみである。調査によると、この形式は文典型教科書だけでなく、当時の文法書においても文語の謙譲表現として扱っている。そこで、松本編纂の会話教科書で文語の謙譲表現が見られるのは個人的な要因によるものと考えられる。

## X 助詞を介する形式と助詞を介しない形式

本研究で調査対象とした文典型以外の日本語教科書において同じ意味と待遇を表すが、助詞を介する形式と助詞を介しない形式が同時に見られるものがある。例えば、「お（ご）…致す」と「お（ご）…を致す」、「お（ご）…する」と「お（ご）…をする」、「お（ご）…申し上げる」と「お（ご）…を申し上げる」などである。

宅間（2002）によると、「お（ご）…をする」は「お（ご）…する」の前段階形式であるため、他の形式も「お（ご）…する」と同じように助詞を介する形式は助詞なしの形式の前段階形式ではないかと考えられる。少なくとも、用例から見ると、助詞を介する形式と助詞を介しない形式は同じ機能と意味を持っている。

## XI 謙譲表現ではない表現の出現

調査対象とした教科書の中で、謙譲語ではない語が見られる。例えば、「出る」「願う」「食べる」である。

「出る」は高知の方言で謙譲語として使用されている。非常に興味深いのはこの表現を松本亀次郎と松下大三郎のみ扱っていることである。しかし、松本と松下は静岡県出身であるが、静岡県の方で「出る」を謙譲語としての用法が全く見られない。また、松本は『佐賀県方言辞典』を編纂したことがあるが、佐賀県方言において、「出る」は謙譲語として使われていないようである。

「願う」は昔から現代に至るまで、謙譲語として使われたことがないが、松本だけがこの語を謙譲語として取り上げている。

「食べる」は時代の変遷とともに、謙譲の意を失い、ただ動詞として使用されている。第3章と第6章で述べているように、この表現は少なくとも江戸時代は謙譲語であった。

## XII 「お（ご）…申す」の減少と「お（ご）…する」の多用

時代の変遷とともに「お（ご）…申す」の用例数は減少している。それに対して、「お（ご）…する」の用例数は増えている。「お（ご）…致す」はほとんど変化がない。「お（ご）…申し上げる」は昭和前期の日本語教科書においてまだあまり用いられない。大正期の教科書に四形式の用例数が少ないのはこの時代に編纂された教科書が少ないからであると考えられる。

## 教科書の種類から見た近代日本語教科書における謙譲表現の特徴

会話教科書における謙譲表現は形式が、最もバラエティに富み、そのほとんどが日常生活で広く使用されているものである。また、たとえば、松本亀次郎は会話教科書で謙譲表現ではない表現を取り上げていることなど会話で編纂者の個性が見られる。

文型的な学習項目を中心とする語法型教科書では様々な形式が取り上げられているが、会話教科書と比べ、それほどバラエティに富んでいない。会話教科書で見られる表現は語法型教科書においてほとんど見られる。

文典型教科書でのみ扱っている謙譲表現はほとんどが古い表現であり、会話教科書で見られない表現が多い。それは、文典型教科書は口語文法だけでなく、文語文法も扱っているからであ

る。そして、「お（ご）…する」のような規範として認められていない表現は文典型教科書で全く見られない。それは当時の日本語教科書の編纂者にとって、「お（ご）…する」が新出現の表現として、日本語教科書の編纂者にとって、日本語学習者に学習させる必要がないものとされたからであると考えられる。

4種類の教科書の中で、謙譲表現が最も少ないのは読本教科書である。それは読本教科書で取り上げられている文章はほとんどが記述内容を重視した文章であり、謙譲表現を用いる文章が少ないからである。ただし、他人の話を引用する場合、「申す」と「申し上げる」はより多く使用されている。

## 今後の課題

- (1) 本研究では、中国人留学生教育の第一人者である松本亀次郎と留学生教育機関として中心的存在であった宏文学院の日本語教師編纂の日本語教科書を対象とし、近代日本語教科書における謙譲表現について考察を行った。しかし、宏文学院だけでなく、当時数多くの日本語教育機関も日本語教科書を発行していた。たとえば、法政大学、振武学校、経緯学堂などである。そこで、今後は前田の『日本語教科書目録集成』を参考にしながら、調査対象を増やし、考察を続ける。
- (2) 「お（ご）…する」は調査対象とした文典型教科書で全く立項されていない。そこで、今後は文典型教科書においていつから文法項目として記述されるのに注目したい。
- (3) 調査対象とした教科書において助詞を介している「お（ご）…をいただく」が見られるが、助詞を介していない「お（ご）…いただく」は全く現れない。そこで、「お（ご）…いただく」はいつから日本語教科書で見られるかについて調査したい。
- (4) 現代の日本語で誤用とされている「申される」は近代の日本語教科書で長期間見られるのか、あるいは、ある時期だけに現れるのかについて、今後の調査で明らかにしたい。

## 引用文献

- 伊藤博美（2018a）「近・現代の謙譲語形式の消長とその背景-「お／ご～」の四形式-」『近代語研究』20 近代語学会 武蔵野書院 pp. 207-222
- 伊藤博美（2018b）「近現代の謙譲語における補語の権限領域配慮について」『日本語学論集』14 pp. (52)64-(64)52
- 大石初太郎（1966）『正しい敬語：あなたは言葉で評価される』大泉書店
- 菊地康人（1997）『敬語』講談社学術文庫
- 小松寿雄（1968）「「お…する」「お…いたす」「お…申し上げる」の用法」『近代語研究』第二集 近代語学会編 武蔵野書院 pp. 315-328
- 宅間弘太郎（2002）「「お…する」表現をめぐる：その成立と規範的用法について」『語文研究』93 九州大学国語国文学会 pp. 39-51
- 辻村敏樹（1977）「日本語の敬語の構造と特色」『敬語』（岩波講座日本語4）岩波書店pp. 45-94

山崎久之（1990）『続 国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院